

人生の二つの土台

聖書において「信仰」とは、非常にダイナミックな性質をもつもので、単に神の言葉を聞き、それに知的に同意するということではない。それは、聞いた神の言葉を、「わたし」に対する神の語りかけの言葉として受け入れ、そのように信じ、そのように信頼して従って生きるということを意味する。この信仰の本質としての「信頼と服従」ということを教えるために、主イエスは「山上の説教」の結論部で、ひとつの有名な例えを語られた。

そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行なう者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行なわない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった（24～27節）

大変分かり易い例えである。主はここで、ご自身のみ言葉への信頼と従順を信仰の本質として教え、そのような信頼と従順の欠けた信仰を「砂の上」に家を建てようとする者の愚かさにとえている。そのような実質なき信仰は、神の前に「愚か」であるばかりでなく、「無益」で「むなしく」（ヤコブ2：14、20）、また神への冒瀆ですらあると、他の聖書の箇所は語っている（イザヤ29：13、マタイ15：8～9）。

使徒パウロも、キリスト者の信仰生活を「岩の上に家を建てる」ことになぞらえて、次のように言っている。

わたしは、神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように土台を据えました。そして、他の人がその上に家を建てます。ただ、おのおの、どのように建てるかに注意すべきです。イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることは出来ません」（第1コリント3：10～11）。

この真の土台としてのイエス・キリストの上に信仰の家を建てること、すなわち、日々の生活の中で、救いと命の源であるキリストにしっかりと根を下ろし、キリストとの人格的生命的交わりの中に生き、そのみ言葉に人格的に信頼して従って生きる、ここに信仰の本質があることを使徒たちも教えている（エフェソ2：20、第1ペトロ2：6～7参照）。山上の説教を聞いた群衆はその権威ある教えに非常に驚いた、とある（28～29節）。聞く者を信頼と服従へと導く権威あるメッセージであった。

今日の私たちはどうであろうか。私たちはそのように主のみ言葉に信頼して生きているであろうか。私たちの人生には、時には雨が降り、時には洪水が押し寄せ、時には大風が吹き付けるというような、思いがけない試練の時もある。それは、私たちが本当に神に信頼して生きているかを試す神からのテストであるといってよい。そういう試みにあってはじめて、私たちの多くは神に信頼するということ、キリストを土台としてしっかりと生きることがどういうことであるかを学ぶのである。